

広大から海外へ留学している若手からの便り

米国マウントサイナイ・アイカーン医科大学留学便り

大野 敦司 広島大学病院 消化器診療科 助教

私は現在、米国マウントサイナイ・アイカーン医科大学の星田有人先生のラボに留学しております。マウントサイナイ・アイカーン医科大学は、ニューヨークのマンハッタン・アッパーイースト地区と、イーストハーレム地区との境界で、セントラルパークに接しております。

現在私は、遺伝子発現のパターン (Gene signature) を用いて、慢性肝炎、肝硬変からの発癌や予後予測、薬物によるHCC発癌予防の研究を主に行っております。星田先生のラボは、肝繊維化の研究でご高名な、Scott L. Friedman先生がチーフを勤めておられるLiver disease部門に属しており、毎週、他のラボも交えてのミーティングが行われます。アジア、ヨーロッパ等、非常に多様な人種が集まっておりますが、皆ディスカッションが大好きで、どんどん意見を言いますし、分からない点は納得するまで説明することを求められます。意見を言うだけによく勉強している人も多く、その姿勢は学ぶべき点も多いかと思えます。

研究の進め方、考え方等、日本と違う点も多く、毎日が勉強の日々です。そのままのスタイルを日本でやろうとすると、日本人のメンタリティーに合わないことも多々あるとは思いますが、取り入れた方が良く思うことも多いです。また、モチベーションの高い仲間と出会うのも留学のメリットかと思えます。

最後になりましたが、このような貴重な留学の機会を与えていただきました 茶山 一彰教授ならびに広島大学の諸先生方に心より御礼申し上げます。



マウントサイナイ・アイカーン医科大学 (中央の黒いビル、左の白いビルを含めた一角が大学。右はセントラルパーク。)

編集後記

風薫る新緑の頃となりました。新入生諸君や4月から新しいことを始められた方々はだいぶ慣れられたと存じます。季節は巡り、世界にはトランプ、プーチン、習近平と漫画のようなリーダーが出てきて、歴史の大きな変化の中にいることを感じます。大学院が協定を結んで医学生の交換留学をしているトルコの治安が気になります。

Nature Index 2017 Japan によれば、日本の研究力は最近低下しており、その原因のひとつとして研究への投資額の相対的な減少、大学への補助金の減少があげられています。いわば慢性的な飢餓状態の中で、広島大学では越智学長のリーダーシップの元で、決して後ろ向きではなく前向きな大学の改革が進んでいると思えます。今号では、4人の新任教授にご挨拶いただきました。大学院の発展のために共に汗を流す仲間が増えました。他に新講座紹介、研究最前線、すぐれた論文も掲載しました。座右の銘は、頁数の関係で次号に掲載とさせていただきます。

2017年5月 広報委員長 坂口 剛正

2017年(平成29年)5月発行

編集発行 広島大学大学院医歯薬保健学研究科広報委員会

住所 〒734-8553 広島市南区霞一丁目2番3号

電話 (082) 257-5013 (霞地区運営支援部総務グループ)

E-mail kasumi-soumu@office.hiroshima-u.ac.jp

URL <https://www.hiroshima-u.ac.jp/bhs>